一社）日本心臓病学会 海外留学助成制度

［2019 年度助成］　田中　徹先生（聖マリアンナ医科大学循環器内科学）
［留学先］　ボン大学ハートセンター
［留学期間］　2020 年 8 月～2024 年 3 月

2024 年 9 月掲載

==========

留学報告記

ボン大学ハートセンター/聖マリアンナ医科大学 循環器内科学
田中徹

“ヨーロッパに住んで医師として働いてみたい”。そのようなきっかけではありましたが、日本心臓病学会からの助成も頂き、ドイツの University Hospital Bonn (ドイツ, ボン)に 2020 年 8 月から 2024 年 3 月の期間で留学を行い、この度日本に帰国しましたのでご報告いたします。

University Hospital Bonn はドイツの西部のライン川沿いにあるボンという都市に位置する大学病院です。ボンはかつての西ドイツの首都であったことで知られていますが、とてもコンパクトにまとまっていて、自然が多く、のどかな街です。University Hospital Bonn の Heart Center は Director の Prof. Georg Nickenig を中心に弁膜症のカテーテルインターベンションに非常に力を入れており、ドイツでも有数のハイボリュームセンターとして知られています。特に三尖弁治療の件数が多く、これまで三尖弁カテーテル治療に関する複数の治験や臨床研究を主導してきました。私は、日本での日常診療の中で、三尖弁閉鎖不全症に対する低侵襲治療の必要性を強く感じていました。そのため、今後日本にも導入が期待される三尖弁カテーテル治療について臨床および研究を行いたく、ボンへ留学することにしました。

ボン大学では SHD チームに所属し、臨床のサポートを行いつつ、臨床研究を進めていくことになりました。研究は主に僧帽弁、三尖弁などのカテーテル治療の症例のボン大学でのデータベースを用いて後ろ向き研究を行いました。幸運にも恵まれ、筆頭著者として 20 本近くの論文を執筆・発表することができました。様々な研究トピックに携わりましたが、中でも心房性機能性僧帽弁閉鎖不全症に対するカテーテル治療の治療成績、三尖弁カテーテル治療における右心機能の重要性、の 2 つに関しては特に力を入れて取り組めました。同僚からは、いろいろな意味があったかもしれませんが、“Tetsu は Paper machine だね”と言われていました。

また、ドイツでは日本人医師が医療行為に関わるためには、ドイツ語での医療面接の試験に合格する必要があります。患者役への問診、カルテ記載、上級医とのディスカッションで

構成される試験で、もちろん全てドイツ語です。研究や臨床の傍ら、何度も挫けそうになりましたが、YouTube や参考書で勉強し、なんとか合格することができました。労働許可が得られた後は、助手だけではなく、実際に術者として弁膜症のカテーテル治療を行うことができました。ドイツでドイツ人に囲まれながらドイツ語でカテーテル治療をするのは、日本で治療を行うのとは全く違う世界で、最初に手技を行ったときのことはとても強烈な印象として残っています。また、ボン大学での私の最後のカテーテル治療は、学会でのライブケースで Prof. Nickenig と共に治療を行って、治療後にはサプライズで祝ってくれて、とてもよい締めくくりになりました。

ドイツでの臨床や研究はいずれも日本では得難い研究でした。これから日本でも三尖弁カテーテル治療も導入されてくるかと思いますが、ヨーロッパ随一のハイボリュームセンターで臨床および研究を通じて得られた知識・経験を活かして少しでも貢献できればと考えています。また、多くの困難はありましたが、家族との充実したヨーロッパ生活を送ることもできました。それらを通じて外国での働き方や人生観などに触れて、これまでの自分の仕事や家族との生活に対する価値観などについて改めて考えさせられました。そのような点でも、自分にとって、海外留学を行ったことでとても大きな収穫が得られたと感じています。日本に帰国してからも、循環器臨床を行いながら、片手間にならずにしっかりと腰を据えて、臨床研究を続けていこうと考えています。

今回の留学に際し、日本心臓病学会からは温かいサポートを頂き、大変感謝しています。重ねて御礼を申し上げます。

写真：最後のカテーテル治療の後に Prof. Zimmer（左）と Prof. Nickenig（右）と記念撮影